「朽ちない者とされ」　　２０２３年3月１２日

コリントの信徒への手紙一１５：５０～５８

佐々木　佐余子

今朝は先週の続きでパウロの終末論を学びます。パウロがこのコリント書を執筆した時は、第３回目の伝道旅行の際で AD５７年ごろでした。イエスさまが十字架に掛けられて、約２０年後のことであり、パウロはおよそ４７歳ごろでした。その頃はローマの信徒への手紙も書かれており、パウロは神学的にも信仰的にも円熟期の頃でした。この手紙はパウロのいわゆる辞世の書でもあり、遺言書のような感があります。何故なら、パウロはこの後、ローマ政府によって捕らえられ、１０年後に５７歳で殉教の死を遂げるからです。読んで多少違和感を感じるところがあるかも知れませんがそれは黙示的な書き方をしているからなのです。５０節を読むと「兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことは出来ず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことは出来ません。」 これはどのような意味でしょうか。この言葉は４９節から続くのです。４９節「わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです」とパウロは言います。言い換えると、土からできたその人は、肉と血の人と同じ意味になるのです。また、天に属するその人は神の国と同じ意味になるのです。パウロは言い換えているのです。少しややこしいですが。そして、５３節にあるように「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります」とありますが、古い着物は血と肉の体、新しい着物は神の国の着物と同じ意味に置き換えられるのです。パウロは自分が生きている間に主の来臨（再臨）・終末の時が来ると考えていました。その時の状況を啓示で語っているのです。そのことが５１節からです。「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。」 ５２節「最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちないものとされ、わたしたちは変えられます」というのです。これはこの世の終末時に起こると考えられています。この当時テサロニケの教会では終末がどのように来るのか取りざたされていました。テサロニケの信徒への手紙一４章１５節１６節を読むとこのようにあります。「主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残る私たちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降ってこられます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず、最初に復活し」とあるように、テサロニケのクリスチャンたちは主が間もなく来臨（再臨）すると信じており、その日を迎えることに大きな喜びと希望を持っていたのに、主の来臨が遅れてその日の前に死んだ者もいたのでした。それで、信仰の浅い信者たちは、せっかく福音を信じていたのに、罪赦されて迫害にも耐えてきた人たちが栄光に輝く主を迎えることが出来なくなると考えて悲しんでいたのでした。そして、自分自身にも、そのようなことが起きるのではないかと不安を感じていたのでした。そのようなクリスチャンたちに、キリストに結ばれて死んだ人たちは、まず最初に復活するから心配しないようにと教えます。そして、さらに 17 節を読むと携挙（けいきょ）が語られます。「それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります」と教えました。ここはパウロの黙示を語っているのです。今まで主イエス・キリストを信じて信仰生活を最後まで全うし、希望をもって眠った人たちが最初によみがえり、その次に生き残っている人たちが引き上げられて栄光の主にお目にかかれるのだと言っているのです。携挙とは聞きなれない言葉でして、わたしは今、初めて知りました。携えて共に昇るという意味でしょう。空中で主と出会い雲に包まれて引き上げられるのです。信仰のない人が、いいえ信仰のある人でも聞いたら嘘っぽいと思うでしょう。でも終末時にこのようなことが起こることは嬉しいことです。終末論は希望に満ちていると言えます。パウロはいつまでも主と共にいることになる、

と教えています。迫害にあっているクリスチャンたちは、パウロの信仰を受けて迫害にも耐えられる慰めを与えられたのではないでしょうか。ところが、ナンセンスと言って退けたら、初代教会のクリスチャンの命がけの信仰態度は虚しくなってしまいます。１７節の「雲に包まれて引きあげられる」とは実際はどのような状況なのかわからないけど、雲は神さまの御臨在を示していて、神の臨在の下でキリストは天から降られ、既に眠った者も、今生かされている者も主にお会いし祝福に預かることを言っているのです。この空中での主との素晴らしい再会、そして、同じ信仰を持つ者同士の再会の様子は聖書ではわずかしか語られていませんが、この秘事は最後まで取っておかれるのです。ある信仰問答にこのような問いかけがあります。「生きている時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めは何ですか」と人が問われた時、答えは「わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることです」とあります。慰めは主イエス・キリストのものだというのです。すごい信仰告白です。わたしたちもいつかは終末を迎えるのです。この終末はこの世の終わりと言う意味だけではなく、自分の死もある意味、終末ではないでしょうか。このような時、イエスさまから慰めを与えられて、あの世に旅立ちたいと思います。そして、このキリストとの交わりは来臨の前も後も何ら質的な差はないのです。朽ちるものから朽ちないものへ、世の終わりから新天新地へという想像を絶する変動の中で変わらずに深まっていくのは、救い主キリストとの親しい愛の交わりです。

元に戻って、コリントの信徒への手紙一１５章５３節にこの朽ちるべきものとありますが、５４節でもこの朽ちるべきものがと繰り返し語られます。この朽ちるべきものとは何でしょうか。朽ちるべきものから連想するのは、朽ちる、卑しい、弱い、肉のからだです。これに対して朽ちないとは、栄光、力、霊のからだです。木材は枯れるとぼろぼろになり虫が付きます。このように人間もやがて、土に返るのです。創世記で神は土の塵から人を形づくり（創 2:6)、とありますが本当ですね。３年位で土になるそうです。骨が土になり地面を掘って埋められるのです。元来、人は朽ちる者だけれど、終末時には栄光、力、霊の体を与えられ蘇るのです。初めの人、アダムは自然の人間であり、イエス・キリストは朽ちない命の人です。蒔かれた時は朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。このように教えられると、死が怖いものではなくなりますね。

わたしたちは人の葬儀に出席します。その時棺にある方のデスマスク死に顔を拝見するのです。大抵は穏やかなお顔ですが、中には苦しそうなお顔の方もおられます。人相が変わってしまった方もおられました。闘病生活がどんなに苦しかったかを考えるのです。でもその方がイエスさまを信じ信仰の生活を送っていたら、天で神さまとお会いできるでしょう。喜びであり希望です。コリントの教会にはグノーシス派と言われている人たちがいて、クリスチャンたちを惑わしていたのでした。グノーシス派とはよくわからない教えなのですが、別名グノーシス神秘宗教・知識主義者とも言われているらしいです。簡単に言うと、グノーシスの意味は霊知・知識と言う意味であり、霊知とは不思議で優れた知恵を言うのです。でもとても優れた知恵とは思えないです。イエス・キリストの体は仮の姿であり、変幻自在（へんげんじざい）であり、現れたかと思うとすぐ消えて正体のつかめない幽霊のようである、としているのです。イエス・キリストは田舎から出てきたシモンというキレネ人に変貌してシモンを十字架に掛けたとするのでした。コリントの教会はそのような異端に惑わされていたのです。本当に恐ろしいことです。パウロはこのような考えに真っ向から反対していたのです。聖書で教えるからだとは幽霊のようなものではなく、自然な人間の体であり、それは、いつかは朽ちるものなのです。けれど、からだはギリシャ人のように魂の牢獄として卑しめられないのです。それどころか、神によってつくられたものとして尊ばれるのです。パウロは朽ちる人間のからだに対して、朽ちない霊のからだを語ります。４４節でこのように言っています。「つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです」と教えグノーシスを退けます。しかし、このグノーシスの教えは新約聖書が成立したころには大分はびこっており、使徒たちを苦しめました。少しここでふれてみたいと思います。グノーシス派は AD の１０

０年頃成立したといわれており、丁度このころは新約聖書もほぼ全部執筆されていました。ですから相当新約聖書が影響を受けているのです。今回ヨハネの手紙一を調べてみたいと思います。この手紙はAD１００年頃、教会の伝統として、使徒ヨハネによって書かれたものである、と言われています。牧師で中川健一という先生がおられるのですが、その先生はグノーシスを批判して講演され、今回その講演によるものです。そもそもグノーシスはギリシャ哲学から派生した思想で霊肉二元論を取るのです。霊のみが善であり、肉体や物質は悪であると教えます。その結果、キリストの受肉を否定するようになったということです。イエスが洗礼を受けた時、キリストが鳩の形をしてイエスに降ったとしています。そして、イエスが十字架上で死ぬ前にキリストは離れたのであり、苦しんだのはイエスであってキリストではないと言っているということです。おかしな話ですね。ヨハネの手紙一１：１～２にこうあります。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言葉について。この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです」とあります。ここにある、わたしたちとは使徒であり、ヨハネはイエスの交わりに入るよう読者を招きます。このヨハネは実際主イエスに触れたのです。この１と２節はグノーシスの教えを否定するため書かれたのです。１章６節「わたしたちが、神との交わりを持っていると言いながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行ってはいません」とありますが、ここもグノーシスへの批判になっていて、彼らは自分たちは神との交わりがあるから神の特別な光を受けている、と言っているけれど、光を反映するような歩みをしていない、またそれだけではなく、彼らは信者の交わりから離れて行った、と批判したのです。そして、ここが大事なことなのですが、１章の８節にヨハネはこう言っています。「自分に罪がないと言うのなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にはありません。」 グノーシスの人たちは自分たちに罪はないと言っており、それは、キリストが罪を取り除いてくれたから自分たちはより高い知識によって罪の領域から上げられた、と主張しました。しかし、クリスチャンになっても、罪の性質が完全に取り除かれるまで、人間は様々な罪を犯します。例話で言うと、入浴して体全体が清くなっても、次の日外から帰ってくるとまた体は汚れることに気づくのです。本当の信者は自分の肉なる性質（古い性質）と霊なる性質（新しい性質）が共に宿っていることを認識している。そして、肉なる性質に従って歩むなら罪の束縛におちいることも知っている。真の信者は自分に罪があることとその罪を神が清めてくださることとを信じるのだ、と中川先生は説教しました。今までのことは一例ですが、その他の手紙にも使徒たちが命がけでグノーシスの考えを食い止めようとしている箇所が沢山あるのです。その様に初代教会から異端が少しずつ忍び寄って来ていたのです。

話は変わりますが、神学校の時哲学の時間がありました。最初はなぜ正課に神学だけではなく哲学が入っているのか疑問でしたが、やっとわかるようになりました。初代教会の頃は信仰・教理が定まっておらず、迫害が終わってクリスチャンたちが表に出られるようになって初めてニケア（ニカイア・今のトルコ辺り）で会談がもたれ、クリスチャンは足をひきずったり、腕がない人もいたし、目が見えなくなった人もいたし、半身不随で集まって信条を制定したのです。讃美歌９３―４の２のところですが、ニカイア・コンスタンティノポリス信条として掲載されています。この信条は最初の公式の信条だとされています。その後、使徒信条が制定されたのです。この信条を作成するにあたって哲学の勉強をしなければ制定できないのです。そういうことで神学校では哲学を履修するのでした。最後にパウロはクリスチャンたちを励まし勧告しています。５８節「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」と言ってます。グノーシスに負けないでしっかり足を地面につけてこれからも信仰と奉仕に励むよう主の来臨に望みを持って歩みなさいと元気づけました。わたしたちも朽ちない霊の体を与えられて、これから共に歩みましょう。